

阪神大震災の現地を歩く

- 木造住宅の被害状況 -

東京大学工学部教授 坂本 功

本稿は、平成7年2月27日、北海道大学で開催された講演会「木質構造と耐震設計」で紹介された内容のうち、このたびの阪神大震災の現場を調査した部分を中心に速報として紹介するものです。

阪神大震災が起こったのは1月17日の早朝でした。朝7時過ぎにテレビをつけますと、関西で地震が起きたという報道が流れていました。その時には、まだ高松駅や岡山駅はどうなっているというものでしかなかったのが、重大さが分かりませんでした。午後1時半ころになって、西宮にいる私の兄から、「ものすごい地震があつて、タンスとか立っているものはすべて倒れた。長押しははずれるし、障子は全部破れた」という電話がかかってきました。それを聞いたとき、これはただごとではないなと思いました。

あくる18日に、研究室の助手と相談し、19日に助手、大学院生ら7～8人で現地へ行ってもらいました。私は20日に民放テレビ局の取材班と一緒に三宮に行きました。2回目以降は一人で、延べ4回参りました。現地をただひたすら歩きました。道路わきにある木造は、ほとんど店舗つきの特殊なもので、無数に倒壊していますから、1～2本裏通りをジグザグに、どんな建物がどのように壊れているかを見て歩きました。

高速道路が山側に倒れている。建築もそうですが、土木の先生にとってはより衝撃的だったようです。

市役所の旧庁舎やビルの中間階が崩壊しているというパターンは、これはかつて日本ではなかったものですが、いたるところで起こっていました。市役所の新館は超高層ビルです。このカーテンウ

オールはよく見ていませんが、ガラスは割れていなかったと思います。このすぐ後ろにあるリクルートのビルも全面ガラス張りですが、ガラス1枚割れていません。

木造固有の被害ですが、土でふいてありますから屋根が非常に重い。しかし、下がどんな構造だったかまったく分からない。基礎がどうだったかすら分かりません。完全に倒れたものは調べられないので、倒壊しかかっているものを重点的にさがしました。

北海道は工法が現代的で新しいのですが、関西はふき土を使い、壁に土を塗るという工法があるところだと思います。ある建物の南面は3間半あると思いますが、一番端に半間の壁があるだけです。すじかいが入っていると思いますが、三ツ割



すじかいの入った壁

